静岡大空襲（終戦70年を迎えて）

第56回(30年卒)　滝口政俊

昭和20年6月20日未明の出来事。小学3年生の少国民は米軍機の焼夷弾爆撃により、住んでいた家を焼かれ命からがら安倍川の河原へ逃げた。空襲の前兆は偵察飛行だ、1万㍍の超高々度をマリアナ諸島から発進したB29が蒼穹に引っかき傷の様な忌まわしい飛行機雲を引き、太陽を反射しながら悠々と飛んで行く様を未だに思い出す。ユーミンの飛行機雲ならロマン溢れるが、これはそうはゆかない。偵察を終わった機は不要となった爆弾を捨てて行くのだが、その時爆弾が太陽の反射でピカット光るのだ。爆弾は抛物線を描いて落下するので、頭上で光るのは安全だがB29が自分の方に向かって来る時光るのは危険だ。その後数日して、夜空を埋め尽くすかの如き数百機とも言われた爆撃機の大編隊が、真っ暗な空間から焼夷弾を雨あられのように無辜の住民の頭上に降り注ぐのだった。戦後聞いた大人の話によると、B29は一斉に来るのではなく第一波・第二波と分散して来襲する。そして空襲を終えて基地に戻る部隊とこれから襲撃する部隊の各機の高度はそれぞれ定められているが、中には誤った設定をして空中衝突となり大惨事を起こした機もあったらしい。もうその時点では我が国には高射砲も戦闘機もなく迎撃能力はゼロ、やられっぱなしの状態だった。世にいう無差別爆撃だ。空襲警報解除後帰宅の途中、安倍川を幾十体もの死体が流れゆくさまや真っ黒焦げの赤ちゃんを抱いた母親の死体を見たのが今でも目に浮かぶ。自宅は勿論静岡市の大半は跡形もなく焼かれてしまった。戦後の調査によるとB29は123機飛来し2機墜落、爆弾51焼夷弾13211発投下、死者1952人。安倍川の河原には爆弾の投下跡が何か所もあり、そこに水がたまり格好の小プール状態になり無邪気にもよく泳いだものだった。そして昭和20年8月15日、重大な放送があるので夏休み中ではあったが学校に呼び出され校庭で拝聴したのが「耐え難きを耐え忍び難きを忍び・・・」という玉音放送。殆ど雑音で聞き取れなかったが、ああこれで戦争は終わったのだということは子供心にもわかった。あれから70年、道徳心を始め失われたものも多いが、先人のご苦労で世界に冠たる国が出来たことはまさに奇跡というしかない。あ～あ日本人に生まれてよかった。

もっと詳しくお知りになりたい方は、帰省の折等を利用して次の所へ寄ってみてください。
「静岡平和資料センター」;静岡市葵区伝馬町10－25　中央ビル90　2階　TEL054-271-9004

四国八十八ヶ所お遍路の旅

第67回（41年卒）毛利智子

2014年は、弘法大師様が「四国八十八霊場」を開創されて1200年の記念の年となりました。私たち夫婦も、ほんの少し巡礼の旅に出掛けました。四国の地の自然と同化する事により、心身の修行がされると言われており、穏やかな自然とゆったりと流れる悠久の時間の中に、1200年の歴史と文化を感じました。

まず、一番の霊山寺（りょうぜんじ）でお遍路の身支度を整え、お大師様の生涯と四国遍路の作法とお経の意味を学びました。

「同行二人」お大師様がいつも一緒にいて私達を護って下さると伺い、とても心強く足も軽くなるようでした。一日の旅で3ヶ所しか巡れませんでしたが、今年の5月までは1200年の記念の年とされるそうなので、暖かくなったら又行きたいと思います。

心が洗われる、奥深く貴重な体験でした。